

科学技術コミュニケーション入門

- イベント・フェスを「科学」する -

配当年次 1～4年次

開講時期 前期集中

単位数 2単位

担当教員 須子善彦（ビジネス・ブレイクスルー大学 経営学部 IT ソリューション学科 准教授）ほか

1. 講義内容と目的

【テーマ】

「はこだて国際科学祭」「はこだて国際民俗芸術祭」など函館地域にはたくさんの大型イベント（フェスティバル）があります。また、昨今はソーシャルメディアの普及により、小さな組織や個人においてもイベントを企画・実施することが容易となり、市民活動やスポーツ・芸術活動、まちづくり、その他趣味などの様々な目的・規模でイベントが開催されています。

今年度の「科学技術コミュニケーション入門」では、それら様々なイベント・フェスティバルを「科学」します。イベント・フェスティバルを市民がまちづくりや専門分野と関わるきっかけの場、すなわち、非専門家と各分野の専門家が結びつき、お互いの対話や理解、さらには連携や協働（コ・クリエーション）を実現するための学びの場（PBL の一種）と捉えます。そして、その文脈におけるイベント・フェスティバルを分析・モデル化し、これからの函館のイベント・フェスティバル文化を「設計」します。

科学技術コミュニケーションの敷居を下げ、多くの市民に参加いただくための普及を促進する方法論の一つとして、イベント・フェスティバルを参加者全員で考えます。

【講義内容】

授業自体も、協働（コ・クリエーション）を重要視し、座学中心ではなく、ワークショップやフィールドワーク、アイデアソン・ハッカソンといったコ・クリエーションの手

法を用います。また、イベント・フェスティバルを対象にするという性質上、自然科学に限らず社会科学の視点や、「ワクワク」「楽しさ」「ユーザ体験(UX)」といった主観的評価を含む視点も扱います。大きな柱は以下の通りです。

- イベント・フェスティバルをケースとして、科学技術コミュニケーションの概要を理解する
- 函館の著名なフェスティバルの運営者のレクチャーから、イベント・フェスティバルを分析・モデル化するための知見を学ぶ
- 受講生間の対話や協働を通し、これからの函館のイベント・フェスティバル文化を考える
- これからの函館のイベント・フェスティバル文化のプロトタイプを設計・提案する

【学習目標】

- i. 専門家と市民の間の対話や学習のデザイン、科学技術コミュニケーションに関する基本的な知識やスキルを身に付ける
- ii. 以下のようなイベント／フェスティバルの参加・企画・運営の観点から、専門家と市民の間の対話や学習のデザインに関するアイデアや企画を考えられるようになる
 1. イベントを新たに創ろうとしている人が、先人から学び、重要な哲学・注意点・その他ノウハウを学び、自分のイベントに活かすことが出来るようになる
 2. 函館で漠然と何かしたい・学びたいという人が、イベント・フェスティバルへの参加・運営参加を通して、そのきっかけをつかむことが出来るようになる
 3. 既に現在イベント・フェスティバルに関わっている人にとっては、他の運営者と知識やノウハウを共有し、イベントの継続性や価値を高め、各イベントにおける共通の課題の解決をすすめることが出来るようになる

2. 講義計画

この授業は、講義形式に加え、グループでの対話、協同作業、ふりかえりなど随所にアクティビティを織り交ぜながら実施します。実践と知識の往復による深い理解、深い学

びを達成するための授業（アクティブラーニング）を目指します。以下は大まかな授業の流れですが、状況の進展によって内容や構成が変わることがあります。

第1講 授業ガイダンス／オープニング・ワークショップ

第2講 オープニングレクチャー「イベント・フェスを科学するとは」

第3講 ゲスト対談: 函館のイベント・フェスティバルの今とこれから

第4講 グループワーク対話(1): フェスを調査・観測する～フェスの始め方・参加の仕方（グループワーク）

第5講 グループワーク対話(2): フェスを科学する～フェスのモデル化・可能性を最大化する（グループワーク）

第6講 マイプロジェクト対話(1): 函館と「私たちごと」（グループワーク）

第7講 マイプロジェクト対話(2): イベントと「私たちごと」（グループワーク）

第8講 アイデアソン(1): 学びの機会としてのイベント・フェスの継続発展性や波及効果の最大化を考える

第9講 アイデアソン(2): アイデアの実現を進める

第10講 アイデア発表。授業の中間ふりかえり／わかちあい

第11講 ハッカソン(1) アイデアソンの成果を設計書にする or プロトタイピングする（グループワーク）

第12講 ハッカソン(2) 設計書 or プロトタイプの間中間シェアリング（グループワーク）

第13講 ハッカソン(3) 設計書 or プロトタイプを完成させる（グループワーク）

第14講 最終プレゼンテーション

第15講 授業のふりかえり／わかちあい

3. 成績の評価方法

出席、授業中の発言や参加度、事後提出のレポートなどにより総合的に評価します。

4. 教科書・参考書

参考書として以下の4冊をあげておきます。

- 北海道大学科学技術コミュニケーター養成ユニット(CoSTEP)編著『はじめよう！科学技術コミュニケーション』ナカニシヤ出版、2007
- 渡辺保史著『情報デザイン入門 インターネット時代の表現術』平凡社新書、2001
- 須藤順著・原亮著『アイデアソン！アイデアを実現する最強の方法』徳間書店、2016
- デービッド・ボーンSTEIN (著)他, 井上 英之 (監修・監訳・編集)他『社会起業家になりたいと思ったら読む本～未来に何ができるのか、いまなぜ必要なのか』ダイヤモンド社、2012

その他の参考資料や、授業で取り上げる事例については逐次、講義中にお伝えします。

5. 履修にあたっての注意点

科目名に「科学技術」とついでいますが、履修対象は理工系専攻の学生だけに限りません。「1.講義内容と目的」の【テーマ】において述べたように、イベント・フェスティバルを学びに通じる協働（コ・クリエーション）の場と捉えるため、授業自体も、コ・クリエーションを重要視します。また、自然科学に限らず社会科学的視点や、「ワクワク」「楽しさ」「ユーザ体験(UX)」といった主観的評価を含む視点も扱います。そのため、専攻分野やスキル問わず多種多様な方の参加を歓迎します。（例えばハッカソンを行います。プログラミングスキルは必須ではありません）。

また、受講生のみなさんには、取り組む課題に対して「自分ごと」「自分たちごと」の姿勢が求められます。すなわち、外部から他人事として評論する姿勢ではなく、自分自身が当事者の一人として判断・行動しなければならないとしたらどうするかといった観点から、自分自身の考えや感じたことを積極的に述べ、同様に他の受講生の考えや感じたことを尊重し、答えの無い未来を共に創ってゆく姿勢が求められます。

幅広い視野から他学の学生、地域社会や市民との対話や協働を通し、科学技術の魅力・課題を捉え直す貴重な機会ですので、文系専攻の方を含め、様々な専攻分野からの受講を歓迎します。

6. 備考

本講義はキャンパス・コンソーシアム函館に参加している市内の各大学・短大の単位互換科目となっています。また、学生以外の一般市民の参加も受け付けます。